

11月2日(木) 13:55~14:55
第8会場(会議室 406)

座長：佐方 信夫(平成医療福祉グループ総合研究所)

O-6-2-1 居場所感や他者との付き合いが高齢者の認知症リスク低減に与える影響

武田 佳子¹⁾、本田 周二²⁾、尾山 裕介¹⁾、高杉 友³⁾、溝上 慎一¹⁾
桐蔭横浜大学¹⁾、大妻女子大学²⁾、浜松医科大学³⁾

【目的】日本の高齢者を対象にした認知症リスク要因の研究では、健康診断の結果等の身体的側面よりも精神・社会的側面が認知症リスクの低減に関連があることが報告されている。ランセット委員会の報告書が提示する認知症リスク要因に加えて、居場所感や他者との付き合い等の社会的側面が認知症リスクにどのように影響しているかを検討する。【方法】調査対象者：65~79歳の男女1,500名(男性750名, 女性750名)を対象に調査を行った。(M=71.72, SD=4.20)。サンプルは、クロスマーケティング社の有するパネルを利用し、WEB上にて参加者を募った。調査時期：2022年8月1日~8月3日調査内容：年齢・性別、認知症を伴う要介護認定発生リスクスコア、身体的項目(高血圧・脳卒中・糖尿病・難聴・脳の外傷・飲酒・喫煙)、精神的項目(抑うつ日本語版 CES-D)、社会的項目(友人つきあい、SNS利用頻度、地域社会への効力感、居場所、2つのライフシニア版、セミナー参加をたずねた。認知症リスク要因を検討するために、認知症を伴う要介護認定発生リスクスコアを目的変数とし、年齢・性別を統制し、身体的、精神的、社会的側面の項目を説明変数として階層的重回帰分析を行った。それぞれ固有の影響を見るために、第1階層に年齢・性別、第2階層には身体的項目、第3階層には精神的項目、第4階層に社会的項目を階層的に投入することで ΔR^2 も合わせて検討した。倫理的配慮：本研究は桐蔭横浜大学研究倫理審査の承認を受けて実施された。【結果】階層的重回帰分析の結果、各ステップの分散説明率は、第2ステップ($\Delta R^2=.05$)、第3ステップ($\Delta R^2=.15$)、第4ステップ($\Delta R^2=.07$)とそれぞれ1%水準の有意な結果となった。第3ステップまでの R^2 は.44($p<.001$)で、先行研究でも認知症リスク要因とされる抑うつ(本研究では精神的項目)は、年齢の次に高い主効果が認められた($\beta=.27$ $p<.001$)。社会的項目では、居場所($\beta=-.15$)、友人つきあい($\beta=-.10$) 1%水準の有意な主効果が認められた。【結論・考察】先行研究で挙げられている認知症リスクに影響を与える主な要因として糖尿病や抑うつが本研究でも確かめられた。本研究では新たに、居場所があることや友人とのつきあい、地域への効力感、将来への見通しがあることなどが認知症リスクを低減する可能性が示唆された。

第82回日本公衆衛生学会総会

2023年10月31日(火)・11月1日(水)・11月2日(木)

抄録集 P283